

神奈川県演劇連盟機関誌

ドラマ神奈川

第17号

1999年1月31日発行【神奈川県演劇連盟】

●横浜市中区福富町西通り52 ☎045-261-4866

★40周年記念合同公演

2000年11月後半～12月初旬に開催!

★演出は加藤直氏(黒テント演出家)

制作は山本忠利氏(京浜協同劇団)

に決定。

★上演候補作品を各劇団より募集!

活動の拠点となる『県立劇場』を

神奈川県演劇連盟理事長

飯田 克衛

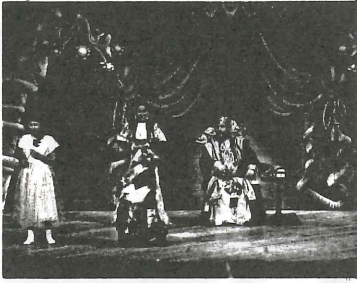
連盟はいま、2000年の結成40周年記念事業に向けて大きく動きはじめ、合同公演の企画は大枠が固まりました。作成予定の40年史も、記録だけでなく多くの方に読んでいただけるようなものにもしたいと思います。記念行事は連盟だけのものではなく、そのことが演劇を愛する人々に大きな刺激となり、一人でも多くの人に演劇の面白さを知っていただくきっかけになればと願っています。二つともなかなかの難事業ではありますが、今の連盟の実力をもってすれば、必ず実現できることを確信しています。連盟は40年で終わるわけではありませんので、この確信の上に立って、更に近い将来に「県立劇場建設促進運動」を行う必要があると感じています。

今各地で公共劇場のありようが議論されています。神奈川では、紅葉が丘再開発構想の中に劇場建設が予定されておりましたが、バブル崩壊によりその夢は消えました。しかしやがて新たな劇場建設の構想が生まれる筈です、神奈川には満足な「劇場」がないのですから。全国にできた豪華な公共の会館・ホールは、あとの運営までを考えている場合が少ないこともあって、立ち往生しているところが多いと聞きます。きちんと機能しているところは、いずれも立派なソフトをもっているところです。ソフトが先に無ければハードは有効に機能しないことを各地で立証してくれています。

基本的には公共劇場は、地域の人が気軽に利用できる場であり、鑑賞や創造に日常的に機能する所だと思います。劇場付きのプロフェッショナルな劇団が優れた作品を創って鑑賞の欲求に応え、県民の創造活動の為にワークショップを行い、創造活動に利用できる複数のスタジオ・稽古場を提供し、資料や図書の収集・整理も行い、演劇センターとしての機能を果たす場所として、質素で中身の濃い「劇場」を創ってほしいと願っています。私たちはそのための運動を考えていかなければと思います。

劇団蒼生樹

『アリーテ』



9月25日(金)～26日(土)
県立青少年センターホール

劇団蒼生樹創立15年おめでとうございます。私は初日のお芝居を見させて頂きました。あの青少年センターホールの舞台をあますところなく動き、踊っていた皆さんに活気あるミュージカルを見せてもらいうれしく思いました。本当に総力をあげて取り組んだという姿勢が感じとられた舞台でした。又途中では大阪弁のプロレスシーンもありあれっと思わせるのも浜田さんの演出ならではの気が

しました。ほめてばかりではいけないので質問まじりに聞いてみたいのですが、アリーテのどちらかの目じりに黄色っぽい線がわざとひかれてあったのですがあれはどういう意図なのか最後までわかりませんでした。又ボックスのキャラクターがコミカルな感じをだんだんと増して来ましたがアリーテ姫との対比においてはもう少しこわい存在であった方が見ていておもしろいのではと感じました。最後に、馬の仕草はとてかわいく文句なしでした。

(劇団蒼い群)

横浜小劇場

『メアリー・ステュアート』



9月12日(土)～13日(日)
関内ホール・小ホール

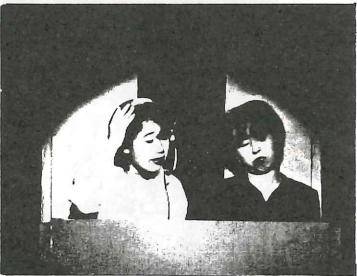
相寄る魂を懐きながら、宗門の政治的抗争に妨げられ、裁く者と処刑される者へと引き裂かれてしまう二人の女王の悲劇…。この格調高いドラマを思い切った様式化を目指した演出によって、メアリーと乳母、エリザベスの侍女の二組を、一方は情熱的に片方は端正にと基本的スタイルが決められ、〈語りと対話〉をまるでフーガのように手際よく進行させて見せた。そしてあの困難な役割りに敢然と立向った四人の女優たちの姿は凛として美しかった。上の限りではこの劇、かなりの成功をおさめたと言えるだろう。

にも拘らず、その割り切りの良さに疑問も残った。ここでは一つだけしか出せないが…、例えばレイプに苦しみもたえるメアリーが、追討ちをかけて世間の悪評を浴びせかける乳母の首を締めて怒りを爆発させる場面、或は許可なくレスターと結婚した若き未亡人を、屈折したジェラーの炎を燃え上らせたエリザベスが、陰険に悪意に満ちた毒舌で責め苛む場面など、もっとギリギリのリアルな演技で表現されるべきではなかったのだろうか…。それによって、語りとのコントラストも際立ち、劇の印象や感銘もより強烈になったような気はしてならない。この劇の基盤には〈情念のリアリズム〉が轟めいている筈だから…。

(劇団麦の会・高津一郎)

プロジェクト夢樹

『BOX 僕らの時代に』



10月17日(土)～18日(日)
湘南しんきんホールくりはま

今回、湘南しんきんホールで行われた、劇団営業二課と夢樹の提携公演「BOX」は、平田慎司氏による最新書き下ろし作品。無実の罪を着せられて逃走する女と、興味本位でその逃走につき合ってしまう女の、不思議な人間模様を描かれている。作者の取材成果も垣間見え、舞台は良いものに仕上がった。そこには数々の難関を乗り越えたプロセスが凝縮されていた。

アマチュア劇団にとって、それまで拠点としていた劇場が無くなってしまおうということは、この上ない大打撃である。訳あって、横須賀市内に有る某劇場が、演劇から撤退してからというもの、演じる場所を失った横須賀のアマ劇団関係者は、七転八倒の毎日を送っていた。だが、そんな状況下でも、役者やスタッフ一同の、舞台にかけける情熱が冷める事はなかった。

そして努力の末に、今回の公演にたどり着けたのは、舞台に携わった者一人一人の、ひたむきな想いが熟して実になったものなのだろう。そう、ぼくらの時代に。(劇団横浜にゆうくりあ 庄司健二)

劇団こゆるぎ座

『小田原藩治水録 「荻窪用水路」』



10月31日(土)・11月1日(日)
小田原市民会館大ホール

土地に不慣れなこともあり、早めに会場に着いた。20分前だというのに既に1階の700席はほぼ満席。話は地元小田原の史実を舞台化したものだ。江戸時代に箱根の湯本早川から、入生田、風祭、荻窪と険しい箱根に農業用水路を引く農民と役人達の苦難の道を、水平師川口広蔵を中心に描いた物語。地元では小学校の教材として扱われると聞く。端々まで丹

念に飾り込まれた舞台は史実であるが故に重みはある。気の触れた女が最後に雷に撃たれ正気に戻る、そこへ用水の水が水路から溢れこぼれるクライマックスは、苦難を乗り越えた百姓の力をかいま見せてはくれ感動をそそる場面だが、少々力不足か。劇中に隧道の事故現場を入れ込むと、ぐつと身近になり百姓の生活がにじみ出るきっかけとなるのではないだろうか。音響効果の粗雑さが少々気になった。しかしカーテンコールの花束の数々は、そんなミスを吹き飛ばす。地域に根ざした市民劇団の象徴なのかもしれない。他ではなかなか見れない企画だ。

(担当 劇団川崎演劇塾)

劇★派

『欠片』



11月6日(金)～8日(日)
相鉄本多劇場

11月13日(金)～15日(日)
タイニイアリス

4人の女性が解体されて一人一人が「喜・怒・哀・楽」のうちのひとつの感情しか持たない欠片(かけら)となってしまう。感情が偏った異様な彼女たちを新しい世界「理想の国」へ導こうとする国境の女が奮闘する話。

近年、「喜怒哀楽」の感情を素直にださない人が多くなったと言われる中で、

極端な人間の姿を通して、人間としての基本的なものとは何なのか、感情を素直に表現できる世の中の必要性を問い掛けているのと感じました。

日頃の訓練の成果か、役者ひとりひとりが異なる状況をよく表現していることに感心しました。

開演前の待ち時間での五月女さんの歌の披露や、公演後の出演者からのプレゼント抽選会、「欠片」の記念グッズのプレゼントは初めての経験でした。観客と出演者の距離間を近づけるための試みなのか、小劇場ならではの面白い企画でした。(劇団蒼生樹 平丸)

劇団河童座『レティスとラベッジ』

11月13日(金)～15日(日)
相鉄本多劇場



レティスが見物人に史跡の説明をしている場面からはじまる導入部は面白い。マニュアル通りの説明では飽きると考え、レティスは次第に主観を交えて面白く説明して見物人を引きつけるが、上層部から叱責され解雇される。短時間に見学者のポジションと服装を変えることで時の経過を示し、解説へのリアクションも変わる。テンポもあって面白いのだが、見物人の何人かは運動会の服装まがいのいでたちなので、この芝居のスタイルに戸惑う。第2部のレティスの家の椅子が、かつて芝居に使った物、ということが解るまでは、導入部のこの衣装と関連して児童劇的雰囲気混在し、違和感を禁じ

得なかった。更に、レティスの語り口が、表情・アクションをふくめて誇張に過ぎた。相手役のロッチ(山中佳子さん)が実にまっとうな良い演技をしていたから、レティスの演技の異質さが余計気になった。とはいえ、ベテラン女優高島明子さんの初演出で、現代社会の醜さへの闘いを小人数ながら力強くみせ、近く50年を迎える河童座に新しい風が吹いたという感動を覚えた。創立からのメンバーである鈴村さんが、今回も適役を得てレティスの宇治野さんを引き立て、ベテランの存在感を示したのは嬉しい。宇治野さんはこの大役をよく頑張った。更に経験を積むことで、河童座にまた一人いい女優さんが生まれようとしていることを感じる。(横浜演劇研究所 飯田克衛)

劇団葡萄座

『赤いくつ』



11月14日(土)～15日(日)
教育文化センター・ホール

横浜演劇の仲間の皆さんが、神奈川演劇祭にむけてさまざまな会場で盛んに公演されていることに、敬意を表します。劇団葡萄座第130回公演『赤いくつ』おめでとうございます。作品の背景である戦後の私は、当時小学生であったわけで、時々胸の熱くなる思いで舞台を拝見しました。こむづかしい話になってしまいましたが、演劇言語と身体行動について改めて考えさせられました。台本・役者

演出のいづれのせいか、説明的な台詞の多さと度重なる因果関係が気が掛かりました。そのことだけが原因でないと思いますが、2時間余の舞台展開がことさら長く感じられました。「英語」に気をとられていませんか。舞台装置プランと照明プランのご努力のわりには、仕上げの部分を丁寧に作って欲しかったと思いました。プロローグとエピローグに不満が残ります。とりわけ平田啓介と女優陣が好演でした。(プロジェクト夢樹 吉本敏克)

公演スケジュール

川崎演劇塾

2/27(土)

観劇希望は劇団まで連絡を

南管子供文化センター・管子供文化センター

『さるかに合戦』木村次郎/作

横浜小劇場

3/20(土)14:00/18:00

21(日)13:00/17:00

横浜市教育会館ホール

『マンザナ、わが町』井上ひさし/作

劇団横浜にゅうくりあ

3/22(月・祭日)

紅葉坂教会地下

『夢の工場』劇団員合作

東京協同劇団

3/27(土)

3/28(日)

多摩市民館

『ドリトル先生怪獣としゃべる』

ヒュー・ロフティング/作

劇団河童座

3/27(土)

3/28(日)

横浜市教育会館ホール

『わしゃ、喰っちゃらん』横田和弘/作

「劇の種と書き方は自分の中にある」

劇団麦の会 高津一郎



1996年に麦の会が上演した「鳥になった少年」というオリジナル劇があります。

これは1983年に起きた「横浜浮浪者連続殺傷事件」から発想した芝居ですが、事件の忠実な劇化を目指したものではありません。

この芝居のラストシーンは、浮浪者や出稼ぎの娼婦たちに非情な暴力を振っていた一人の少年が彼らの激しい反撃を受けることによって(これは人間同士の繋りの決定的な断絶を意味しています)一羽の鳥と化し夜の海の彼方に飛び去る…、というところで終わります。

とりあえず、ストーリー展開から見れば、ここでの〈プロセス〉とは、物語りをどのようにして〈鳥の結末〉にもっていくか…、そのための手練手管ということになるでしょう。ただ、一口にテクニクと云っても、そこには登場人物・構成・メッセージとか、その他劇を成立させるために必要な要素のすべてが関わってきます。そしてもう一方で書き手は、芝居を見てくれる人々の心をどうやったら揺さぶれるかを想定しなければなりません。

要するに台本作りの〈プロセス〉とは、一つの劇的世界を構築するために行った書き手内部の試行錯誤のすべてであり、書き手の個性・題材によっても一つ一つ異なる筈ですからそのマニュアル化は殆ど不可能です。

だからと云って、台本書きを小難しく考える必要もありません。手順なんか知らなくとも、本当に人に伝えたいことがあり、それを芝居として表現したいと望んでいるならば…、そこで誰れもが持っている想像力や構想力をフル回転させることができるならば、テクニクなど自然に生まれてくるものです。

乱暴な言い方をしてしまえば、自分が書きたいと思っている芝居の題材があつて、色々と思いを悩んでいるときにふっと或るシーンのイメージが浮んできたりしたら、その場面に必要と思われる人物たちを登場させて、喋らしたり動かしたりして、それを記録していけばいいのです。どのシーンから入っても構いません。とにかく、そういう断片がどんどん現れはじめればしめたものです。劇はもう書き手の内部で動き始めているのですから…。トップシーンが呼びかけてきたら、そこから出発すればいいのです。書き始めたら必ず書き上げること、これが鉄則です。

ところで「鳥になった少年」というこのドラマ、発想点となった「横浜浮浪者殺傷事件」が一つの軸です。それから二つ目の軸として、50数年前バブアニューギニア島での悲惨な戦争の中で起った「原住民戮殺事件」を置きました。それからこの二軸を繋ぐ物語を紡ぎ出す者として、殺傷事件の犯人の少年の祖父(島からの生還兵)・妹(祖父・兄・弟の批判者)・末弟(弱者に差別と排斥の暴力を振う者)、次に祖父を慕う浮浪者や女たち、それから祖父を地獄の島へ連れ戻しに訪れる戦友の亡霊などが登場します。更に何らかの理由で人間関係を

断絶されると人は霊の仮の姿である〈鳥〉に移行してしまうという島の神話が基調音のように繰り返し現れます。

要するにこのドラマでは現在と戦時という時間軸、都市と神話という空間軸、その両方の境界線を崩して混在させているのです。

その様な伏線と構成によって、このドラマのラストシーンでは、祖父が孫の弟と闘って倒され、弟は浮浪者たちの制裁を受けて倒されます。そして祖父は戦友の亡霊によって南の島へ連れ去られ、弟はアオバトとなって夜空の彼方へ飛去っていくのです。

この様なイメージで私は、人間関係の〈断絶〉の痛ましい結果を眼に見える誤ちと罪として描きたかったわけです。

思い出しましたが、このドラマ〈戦後50年メモリー〉として上演されたものです。

それにしてもこのドラマ構成、これから台本を書こうという人にとっては、ややこしくて余り参考にならないんじゃないか…、と叱られても仕様が無いのですが、そこをもうちょっと違った視点で見ていくと、どの劇団でも今のところ台本があって稽古が始まる、というのが普通の在り様ですね。とするとドラマを始動させる



イメージと世界は、台本の書き手の手に握られているわけです。もちろん、日常生活の中の心理を素直に書いていくのもいいのですが、日常を超えた世界をドラマに持込んで或種の〈自己開放〉をやっているのけるのも悪くない趣向だと思います。ただ舞台の上の表現は厳しく物理的な制約を受けますが、イメージの中ではどんな状況、どんな世界でも描けるわけで、その意味では台本書きはもの凄く楽しい作業だと言うことができます。そしてイメージの現実的処理はもう一つ別の問題です。

とにかく、台本書きに当たって、どんな手順・どんな流儀で書くかなどということは、自分流に書いて見た結果として見えてくることです。恐らくこれから台本を書こうとするあなたは、これまでに何作かの優れた台本を読んでいるでしょう。或は一流の台本の舞台化に役者として出演しているでしょう。その様な体験を通じてあなたの心と躰には、台本の全体的な姿がキチッと刻み込まれている筈です。それでも書き出せなかったら、あなたの好きな劇作家の好きな場面の4~5頁を自分のペンで写しとってごらんください。せりふの息づかい、受渡しの呼吸、ト書きの織込み方、感情と説明のバランスなど実感的に感じ取れる筈です。のみこめたら、それを方法として使ってみる試みも悪くないと思います。

台本書きについては、初めて書いたので何も整理されていないし、云い盡していない感じですが、自分のことは柵に上げて、神演連の内部から新しいセンスの強力な台本作者がどんどん生まれてくることを期待して止みません。

神奈川県演劇連盟 加盟劇団連絡ノート

京浜協同劇団

211-川崎市幸区古市場2-109
0952 TEL 044-511-4951

川崎演劇塾

214-川崎市多摩区寺尾台2-8-1-12-504 小川方
0005 TEL 044-951-9819

劇団葡萄座

220-横浜市西区宮ヶ谷2-2メゾン前橋302山本方
0006 TEL 045-311-8208

劇団麦の会

220-横浜市西区伊勢町1-61 高津方
0045 TEL 045-241-2828

劇団かに座

220-横浜市西区岡野町1-3-14 田辺方
0073 TEL 045-311-5682

横浜小劇場

231-横浜市中区福富町西通り52
0042 横浜演劇研究所内
TEL 045-261-4866

劇団蒼生樹

220-横浜市西区伊勢町3-133-824 濱田方
0045 TEL 045-242-3584

劇団横浜にゆうくりあ

220-横浜市西区中央1-30-17 泉谷方
0051 TEL 045-321-1920

劇団G/9 Project

232-横浜市南区南太田4-38-27
0006 喜楽荘106 佐藤典久方
TEL 045-716-5297

劇団河童座

237-横須賀市田浦町4-32 横田方
0035 TEL 0468-61-2666

劇団蒼い群

239-横須賀市グリーンハイツ5-2-107 村田方
0846 TEL 0468-49-5785

プロジェクト夢樹

239-横須賀市大津町4-43 吉本方
0808 TEL 0468-36-7494

劇★派

238-横須賀市上町2-1 ネバーランド内
0017 TEL 0468-27-1631

湘南ミュージカルシアター

253-茅ヶ崎市ひばりが丘1-10 前田方
0027 TEL 0467-85-4313

劇団こゆるぎ座

250-小田原市本町2-2-20 梅月食堂内
0012 TEL 0465-22-2988

理事会報告

12月12日(土)

県サポートセンター

10月26日及び12月12日開催した理事会は合同公演のことが中心であったためまとめて報告する。2000年に記念合同公演を催すということは設立40周年を記念するとともに県演連の存在を社会的にアピールすることであり、'98年総会において決定されているものである。この不況時において補助金等については全く不明なるも具体案について検討したものである。

(1) 公演の地域・時期 横浜・川崎・横須賀の三地区の案が出されていたが、横須賀は無理ではないかの意見が横須賀の劇団理事から出されている。横浜・川崎において会場決定がなされているわけではないので至急な対応が必要であること。時期については各劇団の自主公演などとのバランスもあるが、11月

後半から12月初旬を考えていること。(2) 各劇団の参加形態、全劇団の参加が望ましいものの各劇団の事情(河童座、かに座の50周年記念公演など)もあれば、全面参加・一部参加・不参加等があってもよく、各劇団によって決めることになったので各劇団においてはよく検討願いたいこと。(3) 演出・上演作品等、演出としては当初から加藤直氏(県文化財団とのかかわりあり)の名が挙っていたが、12月6日飯田理事長と山本制作担当(理事会において決定)が加藤氏と逢い快諾された。そして上演作品について「三文オペラ」プレヒト「夏の変の夢」シェークスピアの提案がなされたのであったが、上演作品は来年4月の総会をメドに決めることとし、2月、8月の理事会には各劇団が候補作品を提出することとなったので積極的な検討をお願いする。(4) 入場料金。稽古場等 前売料金2,500円(内500円は各劇団の制作費として環元)の提案がなされているが決定には至っていない、稽古場もどう確保できるか不明であるが、演出から週3回及び日曜日の稽古を要望されている。以上のことを踏まえて各劇団は3月まで姿勢を明確にして総会にのぞんで頂きたい。

以上

劇団かに座 田辺晴通

編集後記

幅を他の編集委員の皆さんに迷惑をお掛けしました。お詫びします。(平丸)

しのがいけど、どうやら来年も。

シユで、あまのり観られなかつた

自分の劇団も含め、公演ラッ

クを絵に書いた年となりませう

発行。今号は一九九九年一月三十日

年となり、よいよ二十世紀最後の

とをキヤッチして、世の中の水

ねて、ジャンプ・アップ!!

大きく見ひらいて、世の中の水

村田次郎